

教育センターだより

～第101号～



令和4年10月7日発行

佐野市教育センター

佐野市上羽田町1134番地1

☎ 20-3108

20-3048(相談専用)

教育センターによる不登校児童生徒&保護者への支援

児童生徒数の減少に反して増加する不登校児童生徒数。佐野市教育センターでは、この現状を重く受け止め、不登校児童生徒とその保護者を支援する取組の充実に努めています。以下、今年度の様子を紹介します。

●「アクティヴ教室」

平成3年度に県内3カ所の「登校拒否適応指導教室モデル教室」のうちの1つに指定され、北中学校内に分教室として開設されたのが始まりで、今年で31年目となります。今年度は、現在16名の児童生徒が通級し、主に午前中は個別学習、午後は製作活動、農園緑化活動、運動などを行っています。

近年、不登校児童生徒への支援の在り方が大きく変化しています。教育センターでは、これまでアクティヴ教室を不登校児童生徒の「適応指導教室」としていましたが、今年度から「支援教室」に改めました。また、開室時間をこれまでの10:00～15:00から2時間延長し、9:00～16:00としました。

●「小中学生のためのオープンキャンパス ～サノタンからの招待状～」

佐野日本大学短期大学との地域連携事業として、登校に抵抗や不安のある児童生徒(小5(義5)～中3(義9))を対象に昨年度から実施しているものです。

今年は7/19(火)に7名の児童生徒が佐野日本大学短期大学を訪れ、短大生の一人暮らしの話を聞いたり、栄養士・介護福祉士フィールドなどを見学したりしました。その他、点字やオリジナルアロマオイル作り、学食での食事など、貴重な体験をすることができました。

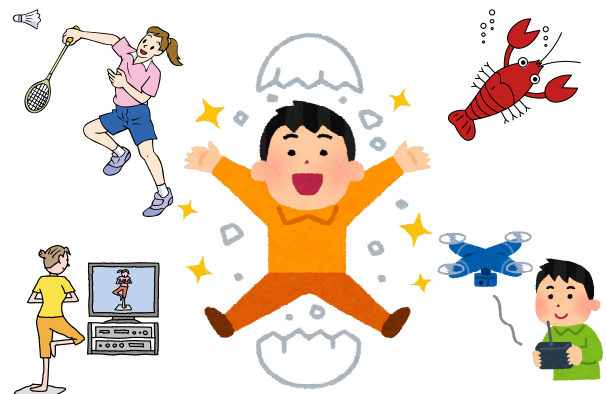
●「不登校支援フォーラム」

平成30年度から始まった不登校児童生徒の保護者への支援と保護者同士のネットワーク構築を目的としたものです。

今年度第1回目の6/16(木)にはお子さんが不登校だった母親の体験談を、第2回目の8/23(火)には中学生の時に不登校を経験した短大生と高校生の話をそれぞれ伺いました。参加者からは「貴重な話を聞くことができ、たいへん参考になった。」などの感想をいただきました。全体会の後のグループシェアも、同じ悩みをもつ参加者同士が情報交換できる貴重な場となっています。第3回目は11/8(火)、第4回目は年明け2/7(火)の予定です。

●「みんなのがくや」

登校に抵抗や悩みのある児童生徒を対象に「やすむ」「ためす」「まなぶ」場として今年度から始めた取組です。これまでにドローン操縦体験、進路に関する先輩との話し合い、段ボールベンチ製作、ザリガニ釣りなど計4回開催しました。活動に対する意欲、自己肯定感、コミュニケーション力などの向上につなげていきたいと思えます。



令和4年度 教育講演会（佐野市教育センター・佐野市教育会 共催）**演題：『子供の事実から「インクルーシブ教育」を問い直しませんか？』****講師：大阪市立大空小学校 初代校長 木村 泰子 先生**

8月10日(水)、佐野市教育会との共催による教育講演会が、昨年同様 Zoom によるオンラインで開催されました。ドキュメンタリー映画『みんなの学校』の舞台となった大阪市立大空小学校の初代校長、木村泰子先生に御講話いただきました。(以下、要約)

障がいがあると診断されてる子供たちは、合理的配慮という名のもとに本人が困っていようとなかろうと、特別支援学級に在籍して特別の部屋で学習する状況がずっと続いている。「普通」はその他大勢の人達、マイノリティの人たちは「特別」。普通というくくりの人たちが進める日本社会では、特別と言われる子供たちは、その他大勢の普通の子供たちに気を遣いながら迷惑をかけないように高校卒業まで学校で学ばなければならないのか？

全盲の東大教授、星加先生からの問いかけ。車椅子の人たちばかりが暮らしている村にはどんな建物が建っているか？そこに自分の足で歩ける人がやってきたらどうなるか？車椅子ユーザーの家は天井がとても低く、自分の足で歩ける人は腰を曲げないと天井に頭がつき、暮らしにくい。あなたは障がいがないから普通の学級。あなたは障がいがあり支援・配慮してもらう必要があるから特別の学級。こうして障がいを理由に普通と特別に分かれて学んでいる。これが日本社会の学校の現実。

大空小で自分を支えたのは、目の前の子供たち。9年間で50人を超える重度の知的障がい、自閉症、広汎性発達障がい、不登校の子供たちが、色んなことを私たちに突きつけてくれた。インクルーシブって何？障がいって何？その前に学びって何？こういう問い直しをした。子供たちのほとんどが学校を恨んだり、学校があるから自分は不幸になったと思っていた。そんな子供たちも、卒業時には、自分から自分らしく自分の言葉で「後輩あと頼むで！」などと語りながら中学校に進学していった。「不登校ゼロ、奇跡の学校」とメディアは表現したが、それは単なる結果。目に見える学力が非常に高い、全国学力調査の結果がとても上、これも単なる結果。安心して学んで自分が獲得した結果、学力が上がる。この学力は10年後の社会にも子供たちがもっていくことができる。

大空の9年間、「インクルーシブ」、「障がい」、「分ける・分けない」、「普通・特別」、これらの言葉は全部捨てた。これらはすべて手段。インクルーシブとは、1人の子供が自分らしくありのままの自分を出して、学校という学びの場で安心して周りの子供たちと学び合えること。大空にいた260人の子供が、自分の個性を存分に出しながら、ありのままの自分を出している友達と毎日ぶつかり、毎日トラブルがあった。このトラブルを生きた学びに変えるのが、私たちの仕事だった。悪戦苦闘した9年間だった。

大空小学校を一番支えてくれた被差別部落のリーダーの方の話。「子供は1人ぼっちになるから死んでしまう。1人でも自分のことが分かってくれる味方がいたら子供は死なない。子供を1人ぼっちにしないでほしい。」「人は暗いところにいたら明るい所がすぐ見える。でも、自分が明るいところにいると暗いところは見えない。明るいところに行ったら、いつも暗いところはどこだと探す人間でいてほしい。」

この言葉を肝に、子供を1人ぼっちにせず全ての子供が安心して大空で学べるよう、学校ですべき優先順位を考えた。子供の見えないところとは何か？ダウン症、知的障がい、ADHD、アスペルガー等、子供がもっている障がいは見えるが、その子が見えないところを見ていたか？私自身、ダウン症の子、不登校の子などと平気で言っていたが、ダウン症という障がいもっているAさんと言うべき。この違いは大きかった。

放課後、子供が帰って職員室に集まったら皆で雑談した。10年後の社会で生きて働く力とは、教員の仕事の上位目標とは、学力とは何かなど、目の前の子供の事実から雑談したことはすごく大切だった。全ての学校はパブリックでみんなのもの。みんなの学校の最上位の目的は、まさに憲法第26条、子供の学習権を保障すること。最上位の目的のためにあらゆる手段を作ればいい。目的につながらなかつたら、やり直しすればいい。そして、学校は子供の命以上に守るべきものはない。取り返しのつかない過去を作らないために、新しい発想で全教職員で学校という環境を作る、これがインクルージョンな学校につながるのではないかと。

教職員の力と地域の力を融合して学習権を保障する学校を作ることが校長の責任。これが地域の学校。「できる人ができる時に、無理なく楽しく。」が合言葉。地域の人々が学校に入ってくるから、子供の顔を知り名前を呼び合える関係性ができる。教員は授業をオープンにし、子供同士が学び合う授業をコーディネートすることが大切。地域の多様な人たちが学校に入ってくることによって学校に多様な風が吹く。

教員のスーツケースのキャパに合わない子供がいた場合、発達障がいというレッテルが貼られ周りの子供たちと分断し、その子供が心の壁を作ってしまう。そこで、スーツケースから風呂敷に変えようという話になり、教員だけでなくその他の学校関係職員、保護者、地域住民全員の風呂敷を全部つなぎ合わせて、子供たちを育てていこうとした。保護者をサポーターと呼び、学校に来た際は自分の子供以外の周りの子供に関わってもらった。学校に大きな風呂敷がいっぱい広がり、どんな個性の子も安心してこの風呂敷の上に乗っていたので、不登校だった子供たちも自分から学校に来るようになった。学校が安全基地になったと言える。障がいのある子もない子も安全基地がなければいけない。

地域住民と学校がみんなの学校を作るためには、ギブ&テイクの関係性を捨てるのが大切。学校のため子供のためでは必ずゴールが来る。自分にとってもいい、それが学校にとっても子供にとってもいいというウィン・ウィンの関係ができる。学校と保護者、地域住民、それぞれの違いはあるが、この違いを互いに尊重し合えば対等な関係性をもつことができる。対等な関係性になって初めて人と人はつながる。子供たちも障がいがある・ないの違いは歴然としているが、この違いを隠したり、そんなこと言ったらかわいそうだから面倒をみてなどと言ったりするのではなく、お互いの違いを尊重し合うことが大切。子供が違いを尊重し合い、対等な関係性で学べる環境をつくる。これがインクルーシブな学校ではないか。

他人と違うことを認め合い、多様性、共生、予測困難な社会において、子供がなりたい自分になるために必要な力として「人を大切にする力」、「自分の考えを持つ力」、「自分を表現する力」、「チャレンジする力」を定め、授業の目的はこの4つの力を付けること、教科指導はそのための手段と全教員で合意形成した。これらは見えない学力、点数やスキルで測定できる学力を見える学力と呼んだ。見えない学力は他者に評価されないため、自分が評価するよう、毎授業時間ごとにノートに1行感想を書かせた。

この自己評価を6年間続けることによってメタ認知能力が勝手に身に付く。見えない学力を優先すると見える学力が向上した。全国学力調査の過去問題は全くやらなかったが、9年目は全国1位の県よりもB問題が8ポイント上だった。見える学力の向上につながった。

何よりも大切にしたのは子供と子供をつなぐこと。単に普通と言われる学級の子供と特別支援学級と言われる子供たちをつなぐのではなく、1人1人違っている子供たちみんなをどれだけ私たち学校の大人がつなぐかが大切。子供と子供がつながれば、自殺、不登校、いじめという言葉は生まれえない。全てはこの子供と子供をつなぐために、校則、学習スタンダード、決まり、マニュアルなどを全部捨て、自分がされて嫌なことは人にしない・言わない、このことだけをみんなで大事にした。約束を破ったら自分のためにやり直しをすればいい。

自分と違う他者の中で、自分と他者とどう折り合いをつけていくか、そのことを学ぶためにフルインクルージョンの学びの場が必要。この子のためと思って指導したことが結果的に子供同士を分断したこともあったが、何度もやり直しをした。私たちの仕事は指導力を上げることでなくて、子供が学ぶ学校のこの空気、この環境をどれだけ豊かにするかということ。環境を作っているのは1人1人の大人の表情、言葉、行動。その様々な大人が学校で様々な子供たちが吸える空気を作っていけば、子供は子供同士、主体的に育ち合う。

障がいはその子が生まれもった個性。その個性を長所に変えるのが学校。この障がいを長所に変えることが特別支援教育だと考える。障がいとは何か。その子が行動する時にその子の周りに障壁がある。その周りの障壁を障がいと呼ぶのではないだろうか。特別支援教育でその子の周りに子供たちを豊かに育てたら、障がいは長所に変えられる。気付いたら全ての子供が育っている。全ての子供の学びを保障するために、子供を主語にした学校を作るために、教員に不可欠な力は人の力を活用する力。自分は無理と判断したら、その子が安心するのは自分以外の誰だろうと考え、その人の力を活用すればよい。

学びの目的は、その子がその子らしく育つこと。若い先生に届けたい言葉は、「流れる水の如く。流れるのはいともたやすい。流れに逆らって動くのは困難を極める。あなたはどちらを選びますか?」「HOWは未来!」できないことが当たり前。どうしたらこの子は安心するか、どうしたら楽しくなるか、そういうことを皆で考えていけば未来を創っていけると思う。

今年度の教育センターの研修について

ICT活用関係研修会

- ・ 5/26 1人1台端末活用研修会
「ロイロノートの基礎編」
 - ・ 6/10 授業支援ソフト研修会
「チエル インタークラス クラウドの
操作・活用」
- 〈以下、今後の予定〉
- ・ 2/3 アカウント管理ソフト操作研修会
「チエル インタークラス コンソール
サポートの操作」

佐野市では、1人1台端末の活用に向け、協働学習支援ソフト「ロイロノートスクール」と児童生徒端末のモニタリングや操作補助などを行う授業支援ソフト「チエルインタークラスクラウド」を導入しています。「GIGA通信」や「GIGAスクールかわら版」にも実践事例が紹介されていますので、ぜひ参考にしてください。

夏季研修会



- ・ 8/ 8(午前) 学級経営研修会
「私たちの学級経営」
教育センター 指導主事
- ・ 8/ 8(午後) 教育相談研修会
「いじめ問題の法的解釈 ～いじめに
適切に対応するために～」
法律事務所 弁護士
- ・ 8/ 9 情報教育研修会
「Google キックスタートプログラム」
Google Workspace トレーナー
- ・ 8/12 特別支援教育研修会
「インクルーシブ教育システムの推進
に向けた教職員間の共通理解の図り方」
作新学院大学 教授

情報教育研修会以外は、全て Zoom を利用したりリモート研修としました。教育センターでは、毎年夏季休業中に上記の研修会を開催しています。講師や研修内容についてご要望等があれば、お知らせください。

パワーアップ研修講座

いずれも水曜日の 18:00～19:30 に開催



6/22(水) パワーアップ研修の様子

- ・ 6/22 学習指導
「ロイロノートの活用 授業実践編①」
(株)ロイロ 研修担当
 - ・ 9/ 7 教育相談
「ネット依存・ゲーム依存の理解と支援」
佐野市教育センター 臨床心理士
 - ・ 9/21 特別支援教育
「チーム学校としての特別支援教育」
安足教育事務所 指導主事
- 〈以下、今後の予定〉
- ・ 10/19 学習指導 (理科)
「実験・観察の不安や悩みの解決に向けて」
佐野市教育委員会 学校教育指導員
 - ・ 10/26 学習指導 (道徳)
「今求められる道徳科の授業づくり」
聖徳大学大学院 名誉教授
 - ・ 11/ 2 学習指導
「ロイロノートの活用 授業実践編②」
(株)ロイロ 研修担当
 - ・ 11/16 キャリア教育
「自分の将来に夢と希望をもち、主体的
に自分らしく生きる児童生徒の育成」
(株)日本クリエート 代表取締役

10月・11月の研修講座、ただ今、参加者募集中です。勤務時間外となりますが、指導力アップのために参加してみませんか？

「教育の力で佐野市を元気に！」佐野市教育センターは、皆さんの「やる気」と「不安」に応えます。